
パワードライブ

祐輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パワードライブ

【Nコード】

N6888S

【作者名】

祐輝

【あらすじ】

世界の人口を減らすため、政府が造りだしたゲームの中で殺し合うことになる。元の世界に帰るには、他プレイヤーを100人倒さなければならない。一体どうなる！？

プロローグ

この世界は人口が多過ぎる。

全ての国の政府が集まり、ある一つのゲームを造った。

それは、人口を減らすためのゲームである。

ルールは簡単で、ゲーム内のプレイヤーを100人倒すというもの。
ゲームを始めると、政府の造りだした世界、ドライブルに行くことになる。

そこには、村や街があり村人や街人、モンスターもいる。

プレイヤーが元の世界に帰るためには、ルールである、他プレイヤーを100人倒す必要がある。

100人倒しても、ドライブルにとどまることもできる。

ただし、そうした場合、最後の一人にならないと、帰ることはできない。

ドライブルで倒されたプレイヤーは死ぬ。

ドライブルのモンスターは倒してもよい。

より強いモンスターを倒すほど、強い力を手に入れることができる。

村人や街人を倒した際、すぐに失格となり死ぬ。

チームを組むこともできる。

チームメイトが15人を超えたらチーム全員が失格となる。

最後の一人（最後のチーム）となったら、ゲーム終了、無事元の世界に帰ることができる。

今、このゲームをプレイする者達の物語が始まる！

プロローグ（後書き）

完結済みですが、もう一つ書いたので、読んでみてください。

1話 三人の挑戦者

この男は神谷時和^{かみやときわ}。

授業が終わって、友達^{らん}の蘭と轟^{ごう}と一緒に近くのゲームセンターに行くことにした。

時和『なあなあ。知ってるか？近くのゲーセンに新しいゲームがで
きるんだってさ。』

蘭『ホント！？どんなゲームかな？』

轟『どうせシューティングとかだろ？』

時和『それがさあ、なんでも、世界政府に公認されてる程なんだっ
て。』

蘭『それ絶対面白いよ！』

そう言って蘭は一人だけ走り始めた。

時和『ちよっと待てよー。』時和と轟も走り出す。

そうしてゲームセンターに着いた。中に入って、例のゲームを探し
てみた。そこにはおよそ10台くらい同じゲームがあった。

蘭『なんか怪しいけど、これかな？』

時和『ああ、たぶんそうだ。やってみよう。』

三人とも席についた。一見ゲームセンターにあるようなゲームに見
えるが、どうやら違うみたいだ。ゲームの近くに看板があった。

時和『ええっと、何何？』

『まず席の上にあるヘルメットをかぶってください。』

三人ともヘルメットをかぶった。

『次に目を閉じたまま手元のスイッチを押してください。ですが押
したら、この世界に帰って来られるかわかりません。よく考えく
ださい。スイッチを押したらゲームスタートです。』

轟『どうする？』

時和『さすがは世界政府公認のゲーム、手が込んでるねー（笑）』

蘭『違うよ！スイッチ押したら、帰れないかもしれないんだよ！？』
轟『そうだぞよく考えろ。』

時和『それは、この言葉が本当だったら怖いけど、面白そうだからいいじゃん。やろーよ。』

轟『どうなっても知らんからな。』

そうして三人はスイッチを押した。

1話 三人の挑戦者（後書き）

初めは設定とかが多いです。内容的にマンガっぽいです。

2話 設定

かぶっていたヘルメットから、凄まじい衝撃が頭に伝わる。

時和『うわああ。』

蘭『い・・痛い・・。』

轟『ぐっ・・。』

衝撃がおさまると、三人はそれぞれ、何もない、真っ白な空間にいた。

蘭『あれ？ここどこ？』

時和『蘭！？轟！？どこだ！？』

轟『もしかして、ここは、もうゲームの中なのか・・？』

すると、目の前に文字が浮かんできた。時和の目の前には、

『神谷時和様、ドライブルへようこそ。』

蘭と轟の前にもそれぞれ、

『古森蘭様。』

『轟木轟様。』

と浮かんできた。

時和『なんで、俺の名前を・・？』

『今からドライブルでのプレイヤー設定をいたします。』

『ドライブルでは、攻撃手段を決めなければいけません。』

『攻撃手段は三つあり、さまざまな武器を使う、ハンター。』

『超能力や魔術を使う、エスパー。』

『モンスターを引き連れて戦う、ティマーがあります。』

時和『うーん、俺はエスパーかな？超能力使ってみたいし。』

蘭『みんな、何にしたのかな・・。僕は戦うのは嫌だから、ティマーかな。』

轟『ふん！男だったら当然ハンターだろ！』三人ともそれぞれ違う攻撃手段を偶然選ぶことになった。『では時和様、超能力か魔術、

どちらにしますか。』

時和『えっ！？両方使えないの？』

『はい。』

時和『うーん、どっちにしようかな。』

『魔術は攻撃性が高く、超能力は機動性が高いです。多くのプレイヤーは魔術を選ぶでしょう。』

時和『だったら、超能力だな！珍しいから。』

『超能力に決定しました。』

『轟様、使う武器を選んでください。武器は、近距離、中距離、遠距離の三つがあります。』

轟『ほう、じゃあ近距離だな。』

『武器、近距離に決定しました。』

こうして、三人はプレイヤー設定を終えた。

2話 設定（後書き）

。 蘭はかわいい系の男です。轟はヤンキーっぽい男です。時和は・・・

3話 国選び

『次に所属する国を選んでください。』

時和『国？どんなところがある？』

『国は全部で五つあります。が、国の一つのドライブル帝国は選べません。』

時和『なんでだ？』

『それは言えません。』

時和『ちえっ、なんだよ……。あつ、そうだ、国によって何か違うのか？』

『はい。ケアバモファンの支配する獣の国、ファンドローラ。ここは、闘争心の高い者が集まります。周囲のモンスターも強力です。』

『シチコセリの支配する機械の国、メガイヤ。この国以外の者とは決して手を組まない、独立国です。あまり攻撃的ではないようです。』

『スチリアビの支配する魔法の国マジク。この国の住民は優しい者ばかりでした。今はスチリアビの魔法で操られていて、狂暴のとこと。』

『アルスの支配する完全平和主義国、テンライト。戦いたくないプレイヤーは、ここにお集まりください。』

『最後に、政府が支配する国ドライブル帝国。他プレイヤーを100人倒した時のみ入国を許される。ここで、ゲームの調整が行われています。ですが、この国は選択肢には入ってません。』

『さあ、お選びください。』

時和『うーん、やっぱ最初はテンライトかな』

蘭『こんなのテンライトに決まってるよ！僕は戦いたくない。』

轟『みんながどこに決めたかは知らんが、俺は自分の道を行く！よし！ファンドローラだ！』

こうして三人とも国選びを終えた。

3話 国選び（後書き）

スチリアビは唯一の女支配者です。どんな感じかは、読者さんにおまかせします。

4話 ギトス

『……』

時和『……』

『……』

時和『で、次はなにすんの？』

『あなたのプレイヤー設定は終了しましたが、まだ他プレイヤー様が設定を終えてないので、ゲームのスタートはできません。もうしばらく、お待ちください。』

時和『ちえ、なんだよ。早くしてくれよ。』

政府会議室。ここには、世界中の政府人が一人ずつ集まっている。日本政府人『ギトス様、なぜ人口を減らすためだけにこのようなことを？』

ドイツ政府人『そうですよ、人口を減らすだけなら、都内に毒ガスでも撒けばいいだけのことなのに。』

ギトス『君達は何もわかってないな。そんなことをしても、面白くないではないか。私は人が殺し合うのがみたいのだ。』

ドイツ政府人『なんてお方だ……。ひど過ぎる……。』

ギトス『なに？ そんなことを言っている君こそ、こうしてここにいないではないか？ ふざけた事を言わないでくれ。』

ドイツ政府人『ふざけてるのはあなたの方だ！ なぜ人口を減らす！？ そんなに人口を減らしたいのなら、あなたが死ねばいいではない

か!』

ギトス『かわいそうなやつだ・・・』

すると、会議室内にいた警備員がドイツ政府人に向かって銃を発砲した。銃弾はドイツ政府人のおでこに当たり、そのまま貫通した。

バタツとドイツ政府人が倒れた。そのままドイツ政府人は会議室から放り出された。

ギトス『君達に言っておく。私に刃向かうとコイツと同じように死ぬ事になる。いいな?』

全政府人『はい!!!』

ギトス『それと、やつの案を採用してやろう。おい、そこのお前。』

ギトスは警備員を指差した。

警備員『はい、なんでしょう。』

ギトス『至急、毒ガスを用意せろ。そしてそれをドイツ全体にばらまけ。・・・いいな?』

警備員『わっ、わかりました!』

警備員は慌てて会議室を出て、研究室に向かった。

4話 ギトス（後書き）

違う国の人同士で会話が通じ合うのは・・・なんというか・・・あれで
す。考えたら負けてやつです・・・。

5話 ゲームスタート

ギトス『それにしても、ゲームがスタートしないな、どうなっている？』

イタリア政府人『はい、それについてですが、まだプレイヤー設定を終えてない者が多数います。なので、スタートは、まだかと・・・』

ギトス『そうか、だがスタートしたら、皆、そのヘルメットをかぶるように。これをかぶっていれば、ゲームをプレイしていなくても、ゲーム内を見ることができるようになる。まあ、私には必要ないがな。』

アメリカ政府人『なぜですか？』

ギトス『ふん。それは、私もこのゲームをプレイするからである。』

アメリカ政府人『そんなことをしたら、ギトス様が死ぬ可能性が！？』

ギトス『それについては、大丈夫だ。研究室の奴にはちゃんと言っている、私がやられそうになったら、強制的に脱出させろ、と。』
アメリカ政府人『もし、成功しなかったらどうするんですか！？』
ギトス『それも大丈夫だ。ゲーム開発終了後にすぐにプレイし、試してある。失敗するわけがない。それと、プレイヤー設定も済ませてきている。』

アメリカ政府人『そうですか、どうかご無事で。』

蘭『あゝあ、まだかな。そうだ！街に着いたら、時和君を探そう！』

轟『そういえば、ここに来てからどれぐらい経ったんだ？』

時和『このゲーム、人殺しても捕まらないんだよな……。だとすると、プレイヤーの中に殺し屋とか混ざってても、おかしくないかな……。』

『お待ちせいたしました。全てのプレイヤーが設定を完了しました。』

『それでは、ゲームスタートです!!』

5話 ゲームスタート（後書き）

ここからが、本編みたいなものです。応援ヨロシクお願いします。

6話 出迎え

ゲームがスタートした。すると、辺りが突然真っ暗になり、何も見えなくなった。そして、だんだん意識もなくなっていくた……。

蘭『……君！・和君！時和君！！』

時和『……ん……？蘭か……』

時和は目が覚めた。すると、このゲームのルールが一気に頭の中に流れ込んできた。

時和『そうゆうことか。だから世界政府が公認してたんだな。』

辺りを見回してみると、そこには、テンライトの町並みが見えた。

時和『ついたのか……？俺……』

蘭『うん。僕も今、目が覚めたところ。』

時和『あれ？轟は？』

蘭『残念だけど、轟君は違う国を選んだみたい。でも、僕達だけでも同じだったからよかったよね。』

時和『くそ！轟を探さないと。』

蘭『ダメだよ、まだゲームは始まったばかりなんだから、装備も弱いし、強い力も持っていない。まずは、いろいろ考えよう。』

時和『そ、そうだな。急がなくても、轟なら一人でも大丈夫だな。』

そう言っていると、空に浮く、巨大モニターに一人の男が映った。時和『誰だあいつ？』

ギトス『プレイヤーの皆さん、こんにちは。私はこのゲームの主催者であるギトスである。私もゲームに参加しているので、君達と同じ立場にある。一つルールを増やそう。このゲームを止めたければ、この私を倒してみろ！まあ、そう簡単に私は倒せんがな。ガハハハハハハハハ！』

時和『あいつ・・・絶対倒してやる！』

そして少し時間が経つと、画面が変わり、また違う男が映った。アルスだ。この国の支配者・・・というよりは、国の王といった方がいいのかもしれない。

アルス『皆さん、我が国テンライトを選んでくれて、ありがとう。言われてないと思うが、テンライトにケアバモファンの支配する国、ファンドローが攻めて来ている。私は戦う気はないのだが、向こうが本気で攻めて来たら、君達の力を貸して欲しい。まだ攻めて来る気配がない今のうちに準備をしておいてくれ。五億人がプレイすると聞くがその半分がテンライトを選んでいるという。君達の力があれば、奴らを倒すことができる。どうかよろしく頼むよ。それとテイマーの皆さん、このあとすぐにテンライト城に来てほしい。モンスターを一匹プレゼントしたい。』

そしてモニターが消えた。

蘭『やったよ、初のモンスターゲットだよ。』

時和『お前が捕まえたわけじゃないだろ。』

蘭『いいじゃんかよっ！』

蘭は城の方へ走り出した。

時和『さてと、俺もいろいろ試してみるか』

6話 出迎え（後書き）

たぶん長い間轟の出番はないと思います（笑）。

7話 それぞれ

時和『超能力って、何ができるんだろう？』

時和は辺りを見回した。そこには、他のプレイヤーが剣を振ったり、魔術を使ったりして、特訓していた。

時和『街中なのに・・・危ないな。でも、同じ国のプレイヤー同士だから、争わないんだな。よかったよかった。あれ？』

みたところ、超能力を選んだプレイヤーは、全然いなかった。

時和『まさか、この国だけだと、俺だけ！？』

時和はもう一度辺りを見回した。

時和『やっぱりか。』

そのころ蘭はテンライト城に着いていた。

蘭『どんなモンスターがもらえるのかな。楽しみだな。』

ぞくぞくと集まってくるティマー達。そして、テンライト城の扉が開いた。

アルス『さあ、早い者勝ちだよ。人数分はあると思うけど、中には珍しいモンスターもいるからね。』

ティマー達が一斉に城に駆け込んだ。だが、蘭は入らなかった。

蘭『残りものには福があるのかなんとかって聞いたことがあるからね。それに、こんなに押し合ってる中に入るのは、ちよつと危なそうだから。』

男ティマー『モンスターなんて見たことねーから、どれが珍しいのかわかんねー。』

男ティマー『適当にこれでいいや！』

女ティマー『もっとかわいいモンスターは、いないの！？』

・・・十分後。

蘭『さてとそろそろいこうかな。』

すると、蘭の目の前にはモンスターが一匹も残っていなかった。

蘭『あれ？僕のモンスターは？』

そこにアルスがきた。

アルス『あれ、まだ人が残っていたのか。君、モンスターはもらえたのかな？』

蘭『いいえ……。もらってないです。』

アルス『そうか。人数分用意したはずなんだが……。まあいい。君には、とっておきのをあげよう。』

蘭『本当ですか！？』

アルス『ああ。ついてきなさい。』

蘭はアルスのあとを追いかけた。

7話 それぞれ（後書き）

そういえばドイツの人達は怎么样了？その様子は後ほど・・・。

8話 パワードライブ

時和『超能力だからな・・浮かんたりできるかな。』
すると頭の中に文字が浮かんできた。

『空を飛んだりする超能力、フロートを使うには、フライラビットを倒す必要があります。ですが今のあなたでは、倒せないでしょう。』

時和『この感覚・・プレイヤー設定の時と同じだ。もしかしている
いろ教えてくれるの?』

『はい。各プレイヤー一人ずつにこの機能がついています。』

時和『スゲーな!じゃあさ、じゃあさ、今はなにが使えるの?』

『現在あなたが使える超能力は、衝撃波のような波動を飛ばし攻撃する超能力、パニッシュがあります。これは、最初は威力が低いですが、自分が強くなれば、分厚い鉄板に穴を空けられるほどになります。』

時和『スゲー。』

『スタート時に使える超能力はこれだけです。』

『あと、超能力を使うには、心の中で使いたい超能力の名前を念じるだけです。』

時和は試しに念じてみた。

時和『パニッシュと。』

すると、衝撃波が勢いよく前方に飛んでいった。

時和『す・・すげえ・・カッコいい!こんなの見たことねー。』

『それと、超能力とは関係ないですが、全てのプレイヤーが必ず使うことのできる技。パワードライブ。』

時和『パワードライブ・・!?!?』

『そう、パワードライブを使うことにより、一時的に自分の力を解放し、能力が約二倍になります。ですが、時間が経つと力は元に戻り、多少の負担が身体に掛かってしまいます。ですので、短時間に

連続してパスワードライブを使うと、身体が動かなくなる可能性があると思います。』

時和『そんなこともできちゃうのか、この世界では。すごいな、ドライブル。』

8話 パワードライブ（後書き）

次回、新キャラ登場です。
さて、どんなやつかな。

9話 不思議

時和『よし！フライラビットを倒し・・・たいけど、今の俺じゃあ倒せないだよな・・・』

『今のあなたがレベルを上げるのに適した場所は、この街を出てすぐの草原です。そこに出現するゴブリンやカミツキ草を倒すと良いでしょう。』

時和『レベルって・・・ロープレかよ・・・』 まあ、そいつらを倒せば、フライラビットを倒せるようになるんだな。』

『はい。』

時和『よし！いくぞ！』

時和は走り出した。、街を出て、草原についた。

時和『うわ！人いっぱいいるな。』 俺も負けてられないぜ！』

時和はモンスターを倒し始めた。

時和『オラオラ！雑魚モンスターめ！』

両手から連発でパニッシュを繰り出す。

時和『うお。モンスターを倒すって、一回やってみたかったんだよね。まさかこんなところでできるなんて。』

すると、向こうに見覚えのある男がいた。

時和『あれ？あいつ、もしかして・・・。』

時和は男に近づいた。

時和『ねえ、君！』

男『何ですか？』

時和『やっぱり！その顔！その声！お前、静人しずとだろ！？』

静人『お前・・・、時和か？』

時和『そうだよ！まさかこんなところで会えるなんて！何年ぶりだろう？』

静人『俺が、六年のころに転校してからだから、五年ぶりかな？』

時和『それぐらいだよ、ていうか静人もこのゲームに参加してたんだな。』

静人『ああ。暇つぶしがてらやってみたら、こうなった。』

時和『でも、100人倒せば帰れるんだぜ。』

静人『そのことについてだが、いろいろ見て回ってみたが、誰もプレイヤー同士で戦わないんだ。』

時和『それは、同じ国同士だからじゃないの？』

静人『だとしてもなぜだ。みんな元の世界に帰るより、こっちで冒険してた方が面白いみたいなんだ。こんな状態が続いたら、ギトスが黙ってないだろうな。』

時和『そうだな。俺も100人倒すことよりも、レベル上げに夢中になってた。もともと人口を減らすためのゲームなのに・・・。』

静人『とりあえず、俺達でチームを組んでおこう。』

時和『おう。』

9話 不思議（後書き）

ちなみに静人のフルネームは、なりやましくと成山静人です。

10話 再会

時和『そういえば静人は一人で参加したのか?』

静人『ああ。そういう時和はどうなんだ?』

時和『俺は蘭と轟の三人で参加した。蘭は今テンライト城にいる。』

静人『ああ。あの王様の呼び出しか。てことは蘭はティマーなんだな。』

時和『うん。で、轟は……。』

静人『違う国を選んだということか?』

時和『そうみたいなんだ。』

静人『でも轟なら一人でもやっていける。小学生からの仲だ。そういうことは俺達が一番よく知ってるだろう?』

時和『ああ、そうだな。俺達が心配しなくても大丈夫だな。』静人『それで、時和は何を選んだんだ?』

時和『エスパー! 超能力の方な!』

静人『ホントか!? 俺もだ!』

時和『マジか、じゃあさ、フライラビット倒すの手伝って!』

静人『ああ、あいつか。まだ倒してないのか?』

時和『え? 倒したの?』

静人『うん。軽かったよ。パイロキネシスの前ではな。』

時和『ばいりきねしす?』

静人『ああ。』

すると静人は指先から炎を出した。

静人『俺はこの技を極める! そしていつかギトスに会ったら、塵になるまで焼き尽くす!』

時和『スゲー……。どうやったら使えるの?』

静人『えっ? 初めから使えたけど。』

時和『どうゆうことだ?』

静人『ガイダに聞いてみたらどうだ?』

時和『ガイド？』

静人『いろいろ説明してくれるやつだよ。名前知らなかったのか？』

時和『うん……。じゃあガイド、これはどうゆうことだ？』

ガイド『はい。エスパーの方はスタート時に使える魔術、超能力が異なります。』

時和『そういうことだったのか。わかったよ。』

すると、向こうから、蘭が走ってきた。

蘭『おーい。時和くん。探したよ。』

時和『おう！蘭！ゴメンな。で、なんか良いのもらえたか？』

蘭『それがね、すごいんだよ！アルス王直々のモンスターもらっちゃった！神威^{かむい}っていうんだよ。』

時和『ふーん、すごいな。神威^{かむい}ってのは蘭が付けたのか？』

蘭『うん！』

時和『なかなか、カッコイイじゃないか。』

蘭『あれ？隣にいるのって、シズシズ？』

静人『相変わらずだな、蘭は。その呼び方もな。もう静人って呼んだ方がいいんじゃないか？高校生だぞ？』

時和『いいじゃん。似合ってるぜ、シ・ズ・シ・ズ！』

静人『お前なあ……。』

蘭『みんな、昔のままだね！』

10話 再会（後書き）

神威は、見た目は普通の犬ですが、攻撃する時に、体中が金色の炎に包まれます。想像できたでしょうか？

11話 イベント

研究員A『ギトス様、聞こえていますか？』

ギトス『なんだ？研究の者よ。』

研究員A『今のところ、ゲームの死亡者は56人だけです。』

ギトス『56人だと！？なぜそんなに少ない！？これは殺し合うゲームだぞ！？』

研究員A『はい。それについてですが、ほとんどのプレイヤーがこのゲームを楽しんでいます。先程の56人のほとんどもモンスターに倒されたとのこと。』

ギトス『うぬぬ……。たかが殺し合うためのゲーム。面白く造りすぎたか……。だが、今さらやり直すわけにはいかん。このまま、やるしかない……。そういえばドイツはどうなった？』

研究員B『只今、毒ガスを撒いたとのこと。ドイツは壊滅的かと。』
ギトス『そうか。ドイツが世界地図から消える日は、そう遠くはないみたいだな！ガハハハハハハハハハ！！！』

研究員A『それで、どうします？イベントでも起こしますか？』

ギトス『そうだな、奴を始動させろ。』

研究員A『わかりました……。ケアバモファン、始動します！』

時和達がぎやかに会話をしていた時だった。巨大モニターにアルスが映った。

アルス『みんな！聞いてくれ！ケアバモファンが攻めてきた！直ち

に迎え撃つ準備をしてくれ』

時和『なんだって!?!』

静人『もう攻めてきたのか・・・』

時和『準備ってなんもねーしな・・・』

静人『俺は先に行く。俺にはパイロキネシスがある。フロートも使える。それで空から迎え撃つ。』

時和『まてよ!それだったら俺も!』

静人『蘭は任せたぞ。』

そして静人は空を飛んで、ケアバモファンのいるファンドーラにむかった。

時和『静人のやつ、ちょっと強いからって・・・』

蘭『そんなこと言ってないで、僕達も急がないと!』

時和『そうだな、あいつばっかにカッコイイところ取られちゃ、たまんねーからな!まあフロートがないのは・・・しょうがねーか!』

二人もファンドーラにむかった。

11話 イベント（後書き）

今回は少し短かったです、次回は少し長くなると思います・・・。

12話 開戦

時和と蘭はファンドローラへの森の中を走っていた。

時和『ガイド、ファンドローラは遠いのか？』

ガイド『そんなに遠くはないですが、すぐ近くというわけでもありません。』

時和『うーん、よくわかんね。まあこの森を抜ければ、見えてくると思うし、もしかしたら轟がいるかもしれないから。蘭、急ぐぞ！』

蘭『あつ、待ってよー』二人は急ぎはじめた。

その時、静人はもうファンドローラ上空にいた。

静人『ここがファンドローラか。』

すると、ファンドローラのプレイヤーがテンライトへの森へ入っていた。

静人『今入ってった奴らは他プレイヤーにまかせよう。俺はファンドローラに残った奴らを倒すとするか。』

静人はパイロキネシスを使い、炎を自在に操り、攻撃をしかけ始めた。

森の途中だった。

時和『なんだあれ？ウサギが耳を羽みたいに使って飛んでる！？』

蘭『ホントだ！すごーい！』

時和『ん？飛ぶウサギ・・・、まさか！あいつがフライラビット！？』

ガイダ『はい。今のあなたなら勝てるでしょう。』

時和『そうか。蘭！先に行ってくれ！俺はコイツを倒して、フロートを手に入れる！』

時和はフライラビットの方にむかった。

蘭『そろそろ出番だね、いくよ！神威！』

神威『お呼びか？わが主。』

すると前方からファンドーラのプレイヤーが迫ってきた。

蘭『いつて！神威！』

神威『承知！！』

神威の体中が金色の炎に包まれた。

神威『金色火炎！』

敵プレイヤーの方に金色の炎が勢いよく飛んでいった。

敵プレイヤーA『なんだこの炎は！？』

敵プレイヤーB『いやだ！死にたくない！』

敵プレイヤーC『同じテイマーなのに、パワーが違いすぎる……。』

そして三人は炎にのまれた。

三人『うわあああああ！』

蘭『僕が倒した……。』

ガイダ『3人撃破。残り97人です。』

時和『ゴメンよ、ウサギちゃん。死んでもらうぜ！パニッシュ！！』

衝撃波がフライラビットに直撃した。すると時和はなにか新しい力を手に入れた気がした。

時和『これで、使えるようになったのか？』

フロートと念じてみる。時和の体が浮いた。

時和『俺・・・浮いてる！？』

そしてどんどん上昇していった。

時和『スゲー……。あつ、感心してる場合じゃない！急がないと！』

時和は再びファンドーラにむかった。

時和『あつ、蘭だ。なんかスゲー光ってるな……。あれが神威なのか？スゲーな。』

少しして、二人ともファンドーラに着いた。

静人『さあ、次はお前だ。』

敵プレイヤーD『助けてください！私は死にたくないんです！言うこと聞きますから、助けてください！』

静人『俺の言うこと聞くのか？』

敵プレイヤーD『はい、なんでも。』

静人『そうか。じゃあ死ね。』

敵プレイヤーD『そんな……。』

静人『パイロキネシス！！！！』

ガイダ『1人撃破。残り52人です。』

静人『もう半分か。まあ100人倒しても、帰る気はないがな。』

時和・蘭『おーい。』

静人『おう、来たか。』

時和『この辺りに人が全然いないけど、お前がやったのか？』

静人『まあな。どいつもこいつも、助けて助けてって。むかついたんだ。』

蘭『シズシズ、こわいよ。』

静人『ああ、すまん。』

時和『てことは、あとはケアバモファンだけってことか！』

静人『ああたぶんな。』

??? 『どこ見てんだ！まだ残ってんぞ！！』

時和 『お前は・・・！？』

12話 開戦（後書き）

やっぱり文字だけなので、バトルの様子はわかりにくくなったかもしれません。

13話 轟

時和『お前は・・・轟!!』

轟『時和じゃねーか! 蘭も! それに静人! ? 何でお前が?』

静人『久しいな、ゴリラ。』

轟『何だと! ?』

静人『やるか? お前はファンドラーの住人。俺達から見れば敵だ。』

時和『やめろよ! 二人とも!』

静人『なんてな。俺は友達とは戦わない。』

轟『お前・・・。』

時和『よしっ、みんな! ケアバモファンを倒すぞ!』

四人はケアバモファンの方へ走り出した。

静人『着いた・・・。』

轟『この扉の奥に奴はいる。』

時和『いくぞっ!!』

ギィイ

扉を開けた。

ケアバモファン『なんだキサマら! ? 俺様を倒しにきたのか?』

轟『そうだ。てめえをぶっ倒す!』

蘭『コイツ、人間じゃないよ。でもモンスターでもないみたい。』

時和『獣の国の支配者だからな。』

ケアバモファン『ここまで来たのは褒めてやろう。だが覚えておけ、

もし俺様を倒せたとしても、倒した者も死ぬということだな!』

轟『!・・・は・はったりだ! みんないくぞ!』

蘭『いけ、神威!』

神威『承知。金色火炎!』

ケアバモファン『効かぬわ！火炎放射！』

神威『相打ちか。なかなかやるな。』

時和『今度は俺が！パニッシュ！』

ケアバモファン『ぐはっ！まだスタートしたばかりなのに、なんと
いう威力！』

轟『もらったぜ！！』

轟が走り出した。

静人『あいつの言葉、ホントにはったりなのか……『コイツ、
人間じゃないよ。でもモンスターでもないみたい。』『もし俺様を
倒せても、倒した者も死ぬ。』……！まさか、あいつもゲーム
内の住人！？だとしたら、轟があぶない！』

轟がケアバモファンに切り掛かった。

静人『やめろっ轟！はったりじゃない！ホントに死ぬぞ！』
だが、もう遅かった。

ケアバモファン『ぐはっ……。俺の負けだ。だがキサマも死ぬ・
・。』

ケアバモファンは消滅した。

静人『轟、お前はゲーム内の住人を倒した。最初に聞いただろ？ゲ
ーム内の住人を倒したら失格となり、死ぬと……。』

轟『まさか・ホントに死ぬのか！？俺！？』

時和『しっかりしろ！轟！！』

すると轟の体が消えはじめた。

時和『轟！！』

蘭『死なないで！轟君！』

轟『みんなありがとう。でもルールだから、しょうがねーよ。泣き
たいけど……。俺は男だ……。泣けねーよ……。強くなれよ……。蘭・
お前も男なんだから……。な……。』

轟は消滅した……。

時和『ごおおおおお！！！！！！』

静人『……。轟……。』

蘭『うえええん。』

静人『時和・・・俺達の目的はただひとつ・・・。』

時和『ああ。ギトスを・・・ぶっ倒す!!!』

研究員A『ギトス様、ケアバモファンが倒されました。』

ギトス『何だと! まあいい。人口が一人減ったからな。』

研究員A『はい。そして、もうすでにプレイヤーを50人倒しているプレイヤーがいます。』

ギトス『名前は?』

研究員A『成山静人です。』

ギトス『成山・・・静人・・・か。覚えておこう・・・。』

13話 轟（後書き）

轟の出番はこれで終わり？です。
今回も少し長くなってしまいました。

14話 祝祭と影

テンライトとフアンドーラの対立は、テンライトの勝利に終わった。ケアバモファンがいなくなったため、フアンドーラは消滅し、ただの平野になった。

そして、新たな計画が発動しようとしていた。

ギトス『成山・・・静人か・・・。彼ならやってくれる・・・。いや・・・。彼しかない・・・！・・・フフフ・・ガハハハハハハハハハハ・・・！！』

そのころ、時和達はテンライトに戻っていた。

ドーン、ドーン。

時和『おっなんか始まったぞ！』

静人『祭りか？』

大きな花火が綺麗に打ち上げられた。それと同時に巨大モニターにアルスが映った。

アルス『みんな、本当にありがとう。君達のおかげで我が国は勝利を飾ることができた。お礼と言っちゃなんだが、今からテンライト城付近、また城内で、祝祭を開催する。ご馳走は用意してある。ハンターのための武器も用意した。お金を取る気はない。持っていてい

てくれてかまわない。あと、ケアバモファンに立ち向かった、時和君、蘭君、静人君。時間が空いたら私のところに来てくれ。じゃあみんな、盛り上がってくれ!』

プレイヤー達が城へ向かいはじめた。

蘭『王様に呼ばれるなんて・・・ゲームの中でもすごくうれしい!』
時和『そんなことより俺、腹ぺこなんだよ。もう我慢できねー。』

蘭、静人、先に行ってるぜ。』

蘭『待ってよー時和くーん。あ、シズシズも早く!』

静人『ああ。今行く。』

三人も城に向かった。

そのころ、ギトスもテンライトにいた。

ギトス『お前達、これを見ろ。』

部下A『はい。写真・・・ですか?』

ギトス『ああ。コイツは成山静人といって、もうすでにプレイヤーを50人倒している。』

部下C『すごい・・・ですね。じゃあ彼が一抜けですね。』

ギトス『いや、彼は抜けさせない。彼は人を殺してもどうも感じないみたいだ。だから彼に人を殺してもらう。ざっと二億人ぐらいだ。』

部下B『二億・・・ですか・・・。』

ギトス『だが、そうさせるためには少し手を加えなければならない。だから彼を連れてきて欲しい。』

部下A 『わかりました。』

部下B 『必ず連れてきます。』

ギトス 『私は先に本部に戻る。そこに彼を連れてくるように。』

部下三人 『了解しました！』

ギトスの部下は静人を探し始めた。

15話 心変わり

部下B『君、ちょっといいかい？』

静人『何ですか？』

部下B『君、成山静人君だよね？』

静人『そうですけど、なんで名前を？』

部下A『私達と一緒に来てもらう。』

静人『ちよっと、いきなり何ですか！？』

パイロキネシスを使おうとした瞬間、手を縛られ、目隠しもされ、口もふさがれた。

静人『・・・！！！！』

部下C『静かにしろ！！』

静人は腹を殴られ、気絶した。そして、部下達は静人を連れて本部に戻った。

蘭『シズシズ早く！・・・あれ？シズシズ？どこ行っただの？』

本部。

ここは唯一ゲーム外とコンタクトが取れる場所である。

部下達『ギトス様、成山静人を連れて来ました。』

ギトス『そうか。ご苦労。では、目隠しとガムテープを取ってやれ。』

部下達『はっ！！』

静人の目隠しとガムテープを取った。

静人『!・・・お前は、ギトス!』

パイロキネシスを使おうとしたが、手が縛られていて、思うように動かせない。

ギトス『その目だ・・・。私はその目が気に入った。人殺しの目をしている。』

静人『・・・・。』

ギトス『お前、人を殺したことがあるな?』

静人『・・・・ない・・・・。』

ギトス『嘘をつくな!!じゃあその目はなんだ!?』

静人『・・・・。』

ギトス『もう一度聞こう。人を殺したことがあるな?』

静人『・・・・はい・・・・。』

ギトス『誰を殺した?』

静人『・・・それはあんたには関係ないっ!』

ギトス『誰を殺したかと聞いている!!』

静人『!・・・両親を殺した奴を・・・殺した・・・・。』

ギトス『だから怖くなってこの世界に来た・・・だな?』

静人『でも俺は間違っていない!親を殺されたんだ・・・、間違っていない・・・・。』

ギトス『理由はどうであれ、人殺しは人殺し。取り返せるものではない。』

静人『貴様・・・・!』

ギトス『そこでだ。どうせ何をしても償えないのなら、もっと人を殺さないか?お前に恐怖を与えるものも、全て消してしまえばいい。そうすればお前は怖い思いをしなくいい。』

静人『・・・・もう怖い思いをしなくていい・・・・。』

『
ギトス『そうだ。一緒にやらないか?』

静人『・・・俺・・・やるよ。』

ギトス『グフフ、君ならそう言ってくれると信じてたよ。じゃあま
ずシチコセリの国のプレイヤーを殺してきてくれ。』

静人『わかりました・・・。』

15話 心変わり（後書き）

なんと静人が敵に！？
今後、どうなる！？

16話 トランス

ギトス『確か、シチコセリの国、メガイヤに所属する者の中に、戸とた谷彰にあきらという男がいたような・・・。』

静人『戸谷・・・彰・・・。』

ギトス『そう。君の両親を殺した奴だ。』

静人『戸谷・・・彰・・・戸谷彰戸谷彰戸谷彰・・・殺す・・・。』

静人はフロートを使い、真っ先にメガイヤに向かった。

ギトス『グフフ、嘘に決まっとるがな。ガハハハハハハハハハ！』

そのころ、テンライトの祝祭が終わりかけていた。

時和『結局、最後まで静人来なかったな。』

蘭『うん。でもシズシズにも考えがあるんだよ。』

時和『そうだな！』

蘭『うん！』

時和『よしっ、じゃあそろそろアルス王のどこにでも行くか！』

二人はアルス王の元に向かった。

メガイヤ上空。

静人『ここがメガイヤか……。こんな国、消してやる。』

静人は手の平に火の玉を造りだした。そしてそれをどんどん大きくしていった。

ガチャ

時和『失礼しまーす。』

アルス『おお時和君、蘭君、静人君は……。いないのか？』

時和『はい。祝祭の時に別れてしまっただけ……。』

アルス『そうか。でも驚いたよ。あの時のテイマーが蘭君だったなんて。』

蘭『いえいえ。僕がここにこれたのは、王様がくれた神威のおかげですよ。』

アルス『ハハハ。』

時和『で、王様。俺達を呼んだ理由は何ですか？』

アルス『そうだったな。君達に渡したいモノがあるんだ。』

蘭『また何かくれるんですか！？』

アルス『ああ。まず時和君にはこれだ。』

アルスは手の平に小さなカプセルをのせて、時和に見せた。

時和『何ですか、これ。』

アルス『これを飲むと、トランスと言って、超能力のなかでもかなり強い能力が使えるようになる。』

時和『ホントですか！？』

アルス『ああ。トランスを使うと自分の能力を一時的に二倍にすることができるようになる。そして、パワードライブと違って、体に負担が掛からない。』

時和『スゲー！！』
てことは、パワードライブとトランスを同時に使

えば・・・。」

アルス『能力は四倍にも跳ね上がる。』

時和『すごすぎる。』

17話 王からの贈り物

時和『そんなすごいモノ、俺にくれていいんですか!?!』

アルス『君しかないないんだ。君に使ってもらいたい。』

時和『あっありがとうございます!』

時和はすぐにカプセルを飲んだ。

時和『おお、なんかスゲー力が身についたような。』

蘭『よかったね、時和君。』

アルス『じゃあ次は蘭君に渡したいモノがある。』

蘭『はい。』

アルス『君にはこれをあげよう。』

蘭『何ですかこれ。』

アルス『これはモンスターのエサだ。しかも神威専用のだ。』

蘭『これ食べたらどうなるんですか?』

アルス『このエサを3粒食べさせれば、神威の力が数倍あがる。』

蘭『すごいですね!』

アルス『ああ。だが効果が続く時間は短い。でも安心していい。このエサを短時間に何度も与えても、神威にはあまり負担が掛からない。エサは全部で100粒ある。』

蘭『100粒も! いいんですか?』

アルス『ああ。だが一つだけ約束して欲しい。』

蘭『何ですか?』

アルス『一度に3粒以上与えないで欲しい。』

蘭『どうしてですか?』

アルス『神威が暴走し、最終的には体が耐えられなくなり、消滅してしまうからだ。』

蘭『!...わっわかりました! 何があっても3粒以上与えません!』

アルス『ありがとう。君を信じるよ。』

時和『よかったな。蘭。』

アルス『話は以上だ。これからも我が国のため、頑張ってくれ。』

二人『はい!!』

17話 王からの贈り物（後書き）

今回は少し短かったです。次回は長めにつくるので、少し時間が掛かるかも・・・。

感想、コメントどしどしください！

18話 部下、本領発揮

二人は城を出た。

時和『もう祝祭は終わったのか。』

すると時和が、メガイヤ上空に大きな火の玉があるのに気づいた。

時和『なんだあれ？』

蘭『どうしたの？』

時和『むこうの空にデカイ火の玉があるんだ。』

蘭『行ってみる？』

時和『おう。』

時和はフロートを使い、蘭は神威に乗って、火の玉の方へ向かった。

静人『大きくなってきたな。メガイヤのプレイヤーに気付かれる前にそろそろ投げ入れるか……。』

静人は火の玉を投げようとした。

静人『おっ？』

すると静人は、メガイヤの近くにスチリアビの支配する国、マギクがあるのに気づいた。

静人『ついでにあの国も消してやるか……。』

静人は手の平にもうひとつ火の玉を造り、大きくし始めた。

遠くにポツンと一人の男がいる。

時和『あれ？あそこにいるのってもしかして……。静人！？』

蘭『えっ！？シズシズがああ火の玉を操ってるの！？だとしたら一体何をする気なんだろう？』

時和『とにかくやめさせないと!』

その時、ギトスはモニターでその光景を見ていた。

ギトス『くそ、邪魔が入ったか。』

部下達『私達が時間を稼ぎます。』

部下達はすぐにメガイヤ上空に向かった。

時和『やめろ! 静人! 遠すぎて聞こえないのか・・・?』

すると二人の目の前に、ギトスの部下達が現れた。

部下A『ここから先はいけません。』

部下B『彼の邪魔はさせない。』

部下C『ギトス様の命令だ。おとなしくしてもらおう。』

時和『ギトス!? まさかあの静人がギトスについたのか!?!』

蘭『シズシズは大事な仲間なんだ! 邪魔しないでよ!』

神威『主の邪魔をする者、許さん。』

部下B『貴様、何をする気だ!?!』

蘭『いけ、神威!』

神威『金色火炎!!』

凄まじい炎が部下達を包もうとした。

その時!

部下A『私達はエスパーだ。魔術の方の。魔術は攻撃に優れている。だが、防御にも優れている!』

時和『なに!?!』

すると部下は大きな水の壁を造り、神威の攻撃を軽々と防いだ。

部下A『ふっ、弱い。』

神威『金色火炎が効かない!?!』

今度は部下達が力を合わせて、時和達の頭上、足元、前、横、後ろを水の壁が囲んだ。

部下A『もう彼の邪魔はできない。』

部下C『しばらくはこの中でおとなしくしている。』

時和『くそ・・・!』

19話 トランス発動!

時和『なんとかしてこの壁を壊さねーとな。』

蘭『大丈夫!こんな壁、すぐ壊れるから。ねっ神威!』

神威『承知!!金色火炎!!』

壁はびくともしなかった。

蘭『・・・もう一度!』

神威『金色火炎!』

やはり壁はびくともしなかった。

蘭『そんな・・・。』

部下A『残念だったな、少年達!』

部下C『この壁を破るなど、無理に決まっている!』

時和『くそっ!どうすればいいんだ!』

蘭『そうだ!アルス王に貰ったエサを使えば・・・。』

神威『だめだ、今使えばお前らも被害を受ける。』

蘭『だったら、時和君の力を使えば!?!』

時和『その手があったな!』

すぐに時和は力を溜め始めた。

時和『蘭、神威。少し離れろ!うおおお!!』

蘭『す・・・すごいパワーだ・・・。』

部下達が時和の異変に気付いた。

部下C『おいっ!貴様!何をする気だ!!』

部下A『あの光・・・まさか奴、トランスを使おうとしているのか!?!』

部下B『馬鹿なっ!トランスを使えるのはカプセルを持っているアイツだけ・・・。』

そこへ一人の男が来た。

???『そう。僕だけだ。』

???『そう。僕だけだ。』

63

部下達『お前は・・・アル!!』

蘭『あれは、アルス王!?!』

アル『蘭君、驚かせてしまってますまない。事情はあとで話す。今は
静人君を助けるんだ。』

蘭『はいっ!』

そして、時和が力を解放させた。

時和『トランス!!』

20話 静人救出

ゴオオオオオオオオ

時和の体が緑色に光り出した。

蘭『いけるっ！いけるよ！これなら！』

時和『さあ、トランスの力を見せてもらおうか！パニッシュー！！』

時和はものすごい勢いの衝撃波を飛ばし、部下達が造った壁を壊した。

部下B『なんだとっ！？』

部下C『ここは一旦逃げるぞ。』

部下A『アルめ、プレイヤーの味方をしてただで済むと思うなよ！』

時和『アル？ここにいるのはアルス王じゃ・・・まあいいか。』

すると部下達はその場から消えた。

蘭『やった！』

時和『蘭！喜んでいる場合じゃないぞ！早く静人を止めるんだ！』

すると静人は最大まで大きくした二つの火の玉をメガイヤとマジクに向かって投げた。

時和『やめろっ！静人っ！』

蘭『神威、いけるね？』

蘭は神威にエサを与えた。

神威『おお。これはすごい・・・。』

神威はものすごいスピードで一つめの火の玉に突撃した。

神威『私に炎は効かぬ。』

そのまま火の玉は空中で爆発した。

神威はすぐにもう一つの火の玉に向かった。今度は尻尾を上手く使い、あの大きな火の玉をさらに上空へと打ち上げた。そのまま火の玉は爆発した。

静人『貴様ら、俺の邪魔をするな。』

するとアルが静人に魔法を掛けた。

時和『アルス王、静人に何を?』

アル『ああ、今のはリセットといって、相手の記憶を消すことができる技だよ。エスパール全員が覚えることができる技だ。私はギトスにそののかされた時の記憶だけを消したんだが、この技は失敗するとすべての記憶を消してしまうんだ。』

蘭『そんな・・・失敗したらシズシズは僕達のことを忘れちゃう・・・なんて・・・。』

時和『大丈夫だ。絶対に。』

静人がこちらに近づいてきた。

蘭『シズ・・・シズ・・・。』

静人『何してんだ? 時和に蘭? それと・・・アルス王!?』

蘭『! シズシズ!』

時和『成功したのか!? 静人、俺達のことわかるのか!?』

静人『何言ってるんだよ。二人とも?』

時和『いや、なんでもないっ、なんでもないんだっ! なっ蘭?』

蘭『うんっ、なんでもないよっ。』

静人『何だよお前ら。』

蘭『よしっ! この件は終わり!』

時和『アルス王、あなたに聞きたいことがある・・・。』

20話 静人救出（後書き）

一応念のために言っておきますが、アルスとアルは同一人物です。
わかってると思いますが・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6888s/>

パワードライブ

2011年6月26日10時28分発行